

今、行政に求められているもの——曾根純雄

「まち1986」を久しくツンドクしていたが、読んでみた。難しいテーマで、読めば読むほど、感心したり疑問に思ったりでまとまらない。

そこで、旭区役所に十年あまり勤務していた時のことなどを思い出しながら、気がついたことについて述べてみたい。

「地域社会」「地域コミュニティ」という言葉は、「よこはま二十一世紀プラン・旭区別計画」を策定している中で使っていたのだけれども、自分の生活に結びついたものとしてはとらえてなかった。そういった意味では、地域について、また地域社会について考え直す良い機会ではあった。

希望が丘に住み始めて、二年半、顔見知りになり、あいさつを交わす人は何人いるだろうか？ まだ多くはないことに気がついた。

確か、旭区民会議で「地域連帯を

考える」等、地域の問題について話し合いが持たれた時、団地の住民が

「隣近所とのつきあいの煩しさから団地に来たのだと言われたが、子供会、学校など子供を通してのつながりから自然に話し、コミュニケーションがとれるようになった。それまで十年の月日がかかりました」というものがあつた。この発言にみられるように、住民一人ひとり、それぞれの生活の中で、地域の中で、地域の重層構造のいくつかを選択し、結びつき、連なっている。

こうしたことを見てみると、何も活性化だと言わなくても、地域は進み方は遅いがそのままでも十分であり、行政は、土壌づくり、情報ネットワークの整備など、どちらかと言えば、補完的な面をよりきめ細かくすすめるべきだと思う。

そうしたハード面の整備とともに、行政の組織も、それなりに変えていくことも急がなければならない

だろう。現在の機構では、区の職員は、区民一人ひとりに接してはいても、さらに地域まで接するということは難しい。区の職員が地域の実情を十分につかめてはいないというのは当然である。現実には、事務量に

応じた人員配置であり、事務量を超えて「地域活動と苦勞をとにもする」などということは不可能なのが現状です。

現在のこうした「行政のタテ割り構造」を超えて、地域活性化のための行政施策を考え、行動していける職員がどれだけいるだろうか？

そのために「地域担当制の導入」「総合調整機能の充実」という提言がされているが、具体的に理解しにくい。また区役所の地域対応の現場として、区政推進課、市民課、福祉課が挙げられているが、いずれも係としては三人から八人程度の比較的小数人員の係であり、「地域担当制」

を導入するには大幅な人員増が必要になってくるのではなからうか？

様々な問題が考えられるが、結局、地域の活性化といっても、現実に住民は、「その場その場で地域の重層性を巧みに、したたかに使いわけ、様々な課題をこなし」ている。行政に求められているのは行政（職員）がいかに地域の活力とともに歩み、行政と地域との役割を分担し合えるような行政のフレキシブルな組織づくりではないだろうか？

この報告書を読んでいて、納得する部分がほとんどであったが、それとともに現実とのギャップの大きさを感じている。「これからの区の方」なども検討されている中で、区の機構がどう変わっていくのか、一現場の職員として見つけていきたいし、また「地域を知る」という視点をもちつつつづけたと思う。

△保土ヶ谷区福祉課地域福祉係▽

千秀地区に住んで思うこと——小巻三枝子

大変興味深く読ませていただきました

した。東京から地付の農家にお嫁に

来て十五年目になります。かつて経験のないことばかり、いきなりタイムマシンで昔に戻った様に思えたことも、今となってはなつかしい思い出になっていきます。主人が出勤したあと、家長的存在の父、母から昔の話を聞き、父が八歳の時に震災に会い家がつぶれたことなどの思い出、昔の農耕の仕方、谷戸の名前と家号。家号の謂など話つきません。そして今なお人寄というのがあるというのでした。今現在かかわりをもっている人寄は、お庚申様、お題目、お諏訪様そしてサイト（道祖神様）等で、明治の頃から続いている代帳を見せてもらったこともあり、人々は寄合、なごやかに会合の場として町のくらしに一役買っていたのだと思います。大きな屋根の下にその古くから刻まれた歯車の一員として家の中から近所、そして町へとだんだんと広がっていきま

した。父の話の中に多くでてくることは、住友電工です。あの広大な水田を工場に明け渡した時の地主たちの

気持ちはどうなであったでしょう。私がお嫁に来た年の暮れ頃に、今のスクランブルというパチンコ店がある場所にあった田んぼを、父は手ばなしました。毎日毎日話し合いをしてきた。そんな土地の人々の顔が今も思い出されます。

今から約百年前、東海道線がひかれる時、ちょうど田谷のあたりに駅をもつてこようという話があったのだそうです。その頃の地主さんたちが、鉄道がくると稲の根がゆすられて切れて育たない。米が取れなくなるといので反対したそうです。昔は不便でいやだったが、今は静かです。ここは百年をかけて守られた、この自然豊かな環境を、私たちが今守らなければならぬ時ではないかと痛感しています。

この地域にある千秀小学校は、在校生四百八十人と小規模な小学校ですが、まとまりのあるこの地域ならではのPTA行事が開催されます。その度に町内の役員や団体に要請があります。PTAの委員は地域との

つながりはほとんどありませんが、長尾台の地区代表委員は長尾台子ども会より選出されています。

自然に恵まれたこの千秀地区ですが、昔から行政区のはずれ、又中学校区のはずれと、人々は不便を強いられたようです。今年の千秀小学校卒業生は町内ごとに通学する中学校を選びました。長尾台は同じ行政区になる中学校へ。田谷、金井は教育委員会から、「新設中学に」ということでしたが、町内臨時総会にて大正中学に多数決で決定しました。微調整を認めるということで新設中学通学も含め、約百人の子供たちは、三カ所に別れてしまいました。私たちは子供が小さいときから、この地区に中学校の新設の希望を議員さんを通してお願いしてもらったのですが、これからできる団地、分譲団地優先で、この地域にかぎらないと思います。が、実態にあった学校区の設定をお願いしたいです。昨年町内の中学校区説明会にて、「米区になっても戸塚区PTA連絡協議会ブロック編成は変えない」と教育委

員会の人と話していたのに、今年、南部ブロックに一変してしまいました。

田谷町内会では現在地付一軒転入者十軒という割合ということですが、歴史がある町で、寄合などに見られるように地付どうしの結びつきも強く、地付きと転入者との融合は、時間のかかる問題だと思います。町内会としても本郷地区と豊田地区の気質の違いで、これから先町内会をより充実していかなければならないと思います。そしてそれを実践していく場所は千秀青少年センターはありません。千秀青少年センターは私たち田谷子ども会の唯一の会合場所になっています。その他町内会の組長定会、各種団体の会合の場であり、地付の人々と転入者の人々の唯一の話し合の場となっています。会合ばかりではなく、最近では、家族ぐるみで一日のんびりと炊飯して近くを散歩して過ごす人が増えてきたと、管理人さんから聞きました。それにあの建物を他の地区や都市から来た人々が、口をそろえて懐しい

と言います。そして木のあたたかい感触に感激して帰ります。私もこの建物が、私たちの町にあることを誇りにしています。歴史の資産が多い栄区に編入したのを機会に、このあたりの歴史的資産を後に伝える為に資料館として残してほしいです。昔を語れる人々は、父たちの代で終りになるのではないかと思います。今後も住民がより活用しやすい千秀青少年センターの存続を希望します。センターの裏山一帯を市民の森とする話も聞きましたが、郷土の自然は、今のままであってほしいのです。

三町内合わせても銀行、郵便局、商店街のない町、都市ガスもきていない町。大船駅にも戸塚駅にも遠くて

仕事を通して考える

—— 魚本一司

日頃区において地域行政に携わる職員として、また、タウンウォッチングの対象となった地域に住む住民として「まち1986」を興味深く読ませていただきました。この報告書の中には、私が日常の業務の中で

不便ですが、私たちの願いは自然をそのままにしてほしいのです。横浜市の公害対策局大気課による昭和五十九年度二酸化窒素濃度のデータで長尾台周辺地区はほほ良好の結果が出ています。この先この辺も市街化調整区域の見直しがあると聞きます。

そのように行政の力で私たちの町の活力にもなるし、今この緑豊かな自然が生きているのも行政の力によるものと思います。

△田谷子ども会育成者副会長、豊田交通安全母の会副会長、前・千秀小学校PTA校外補導委員長、元・矢島幼稚園父母の会会長、元・千秀小学校PTA学年学級委員V

「どうもうまくないな」と感じている現象と、そのことに対する考え方のヒント——今すぐ実行実現できるかどうかは別にして——のようなものが数多くあったように思います。

区では市民課をはじめとして、区

民を対象に様々な行事やイベントを行っています。しかしながらその行事やイベントの際、行政のやるうとされていることと住民のニーズとの間には、かなりのズレがあるのでないかという感じがしてなりませんでした。

このことについては、社会がいわゆる大衆社会化していること、それに伴い「私化」する個人のニーズが多様に拡散していること、そして地域社会に背を向ける「私生活中心主義的態度」が大多数の生活規範となっていることに原因があると自分なりに理解をしていたところでした。

それに対し、個人原理が大衆社会ではなく新しい地域社会を志向している、そして私化する個人のニーズがいわゆる「自主活動」を産み出しそのエネルギーが地域をいきいきとしたものにしていくという報告書の指摘は、私にとって非常に新しいものでありました。ただ、このような形の地域参加ないしは参加したいという意識が市民のマジョリティであるという検証が、個々の事例の研究

と共に今後の重要な課題であると思われまます。

さて、こういった活動に対する行政、特に現場の区では、報告書にもあるようにまさに「そういう活動とうまくつきあっていく方法を、まだ行政は知らない」と言わざるを得ません。この点について報告書は、タテ割行政の弊害と、職員が地域の実態を十分に把握していないということを指摘しています。

タテ割行政の弊害については以前からも度々言われてきたことであります。青少年指導員や体育指導委員は自治会で推薦したにもかかわらず自治会長から情報が流れてきたことがないとか、結局同じ顔ぶれがそろいのに、各課各係がそれぞれモデル地区を作り効率が悪すぎる等々の批判は挙げればキリがありません。

自治会、各種団体、自主活動グループが「教育」「福祉」「親睦」など様々な場面でつながりを持ちながら地域が総体として機能していることを「地域活動の重層的構造」としてとらえ、それを基に行政の対応を